書くことが苦手な児童に対する指導
～文章を三文で書かせる取組み～

尾道市立栗原北小学校　大名克英

はじめに

書くことを苦手としている児童に，その理由を聞くと，どう書いたらいいか分からない，何を書いたらいいか分からないという理由が多かった。書くことが得意な児童でも，どんな文章にすればいいかイメージがつかめなければ，書き始めることは難しいという意見があった。

そこで，書くことが苦手な児童の記述力を向上させるために，伝えたいことを決めさせ，文章を三文で書かせることに取り組んだ。

この取組みについて，実践の趣旨・概要・成果と今後の課題の３点でまとめた。

1　実践の趣旨

書くことが苦手な児童に，三文で文章を書かせることに取り組んだ。三文とは，はじめ・なか・おわりの文である。三文で書かせるには，それぞれの文の役割を考えさせる必要がある。それぞれの文にどのような内容を書くかについては，その文章がどのような文種であるかによって違ってくる。この実践においては，児童の実態を考慮して，日記を扱った。詳しく文種を分類すると，伝達を目的とする記録文の一種で，心覚えのための様々なことがらや事実を正確に書き記した文章である。文章を書くことの意義は，多くの研究者が述べている通り，書くことで考えさせたり，自分の考えをまとめるために書かせたりと様々あるが，今回の実践では，起こった出来事を毎日，書き続けさせることにより，自分のことをよりよく相手に伝える技能の向上をねらった。

また，自分の伝えたいことを明確にするためには，伝えたいことをはっきりとさせた後に，伝える内容だけに限定し，その他を捨てる作業が必要になる。これらを国語科の授業において指導した。

2　実践の概要

話がうまくかみ合わない児童は，問われたことに答えなかったり，自分のことしか話さなかったりする等，自分中心のことしか考えていないことが多い。また，話していることが途中で変わってしまい，伝えようとすることが，話し手に伝わらないこともある。学校や仕事といったパブリックな場においてのコミュニケーションにおいては，問題が生じてくる。

そこで考え，年度当初に実践したことは，構成を教えることである。枠組みの中に言葉を入れることにより，内容を選ばせた。そのために，まず伝えたいことを考えさせた。指導者が，何を伝えたいかを知ることで，アドバイスも可能になる。

図１は，国語ノートである。図２は，児童の書いたノートである。始めは，まだ，メモにすることができていないが，メモ指導を行うことで改善してきた。これらの指導により，いくつかある話したい事柄から，今回伝えたいことを選ぶことが出来るようになった。

図１　教師の示したメモ

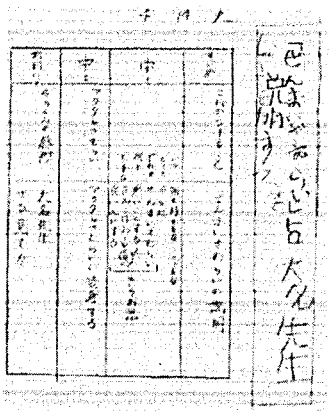
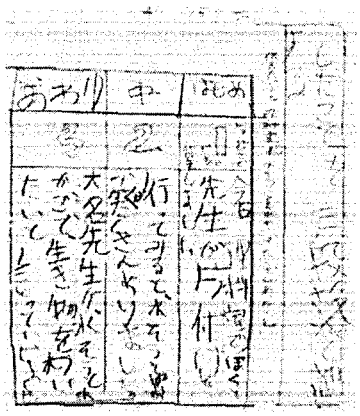


図２　児童の書いたノート



次に取り組んだのが，はじめ・なか・おわりを一文で，文章全体を１２０字程度の文量で書かせることである（**図３・４**）というと短くて，取り組ませやすいからである。書くことを苦手としている児童にとっては，短いということが，ハードルを下げる要因となる。

それと合わせて，三文に書かせるということは，いらない内容を捨てさせ，内容を絞り込むという活動も含んでいる。書くことがいくつもあっても，選材しなくてはならない状況に立たされ，書きたいことを選ばせる活動にもつながる活動である。

図３　１２０字程度の文章①

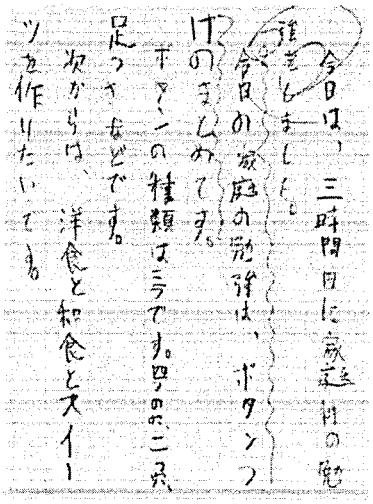
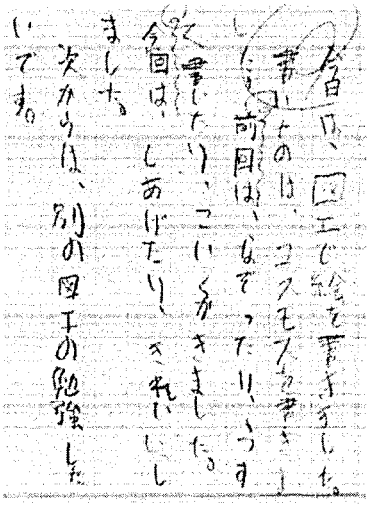


図４　１２０字程度の文章②



その後も継続するために，毎日，日記を書かせた。児童に書かせた後には，内容についての返事を必ず書くようにした。せっかく書いたのに読まれなかったり，文の間違いを正されたりするだけでは，書きたいとは思わなくなってくる。これらを児童に感じさせないことで，書こうとする意欲が湧いてくると考え，実践した。コメントを返すことを続けることで，児童は書きたいことがある時には，普段よりも分量が増すようになった。

ある一人に注目すると，次のような結果になった。

作文を何日分書くことができた。そのうち，段落の役割が明確な文章を○とし，そうでないものを×として，統計をとると次のようになった。

表１　日記の総数と段落の役割○と×

総数	段落の役割○	段落の役割×
１３１	１１４	１７

表２　月別の段落の役割の○と×

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
段落の役割○	8	8	9	１１	１０	6	7	１２	１５	１５	１３
段落の役割×	0	2	3	4	1	1	2	1	1	0	2

三文に絞るといっても，それだけでは書ききれないこともあった。実際，１３１日のうち，半数は，構成の中を二つに分けて，四文になることもあった。

この児童から見えることは，他の児童にも当てはまる。三文の役割が理解できると，それ以外の役割の文を付け加えて書くことも出来るようになった。書きたいことがある時に，この傾向は強くなる。

３　成果と今後の課題

（１）成果

文章全体を把握させることで，児童に，文章を書くことができるという自信を持たせることができた。

自信を持つということが，他の行動に与える影響力は計り知れない。現在，国語教育が抱える問題点も，児童に自信を持たせることの欠如にあるように感じている。「これだけ出来たら，良いですよ。」という枠を示し切れていないことからくる，評価の曖昧さが児童の自信を奪っているのではなかろうか。もちろん，この取組みも，十分とは言えない。読まれた方のご意見をいただき，交流することが書くことを通したコミュニケーションである。

（２）今後の課題

今回，取り組んだ授業は，一文の役割を意識させることである。これは段落を意識させる前段の内容である。一文の役割を理解させることが，後に文章全体のことを把握させることに発展することにつながると考える。

次の課題は，文章における各段落の役割を児童に意識させることである。「役割」とは，全体に対する部分を示す言葉である。段落の役割をとらえさせることは，全体を把握することに通じることになる。伝えたいことが複雑になり文章が長くなっても，伝えたいことは何か・全体の構成をどうかという視点が身についていれば，対応することが可能である。その時の文章をどのように書かせるかを今後考えていきたい。

また，この取組みは，読むことにも発展可能であると考える。書き手の視点が身につけば，読み手になった場合も，その文章の書き手の文体を考えることも少しはできるであろう。このような淡い期待に対し，課題意識を持ち，今後も実践を続ける。